

〔発言者〕 渡辺千恵子

〔発言年月日〕 1956年8月

〔生年、被爆地、職業など〕 1928年生まれ。長崎で被爆。被爆者運動に参加。

〔内容〕

原爆犠牲者はもうわたしたちだけでたくさんです。原爆はわたしの身体を生まれもつかぬかたわ(原文ママ)にしてしまいましたが、わたしの心までも傷つけることはできませんでした。(中略)

世界の皆さま、原水爆をどうかみんなの力でやめさせてください。そしてわたしたちがほんとうに心から、生きていてよかったという日が一日もはやく実現できますよう、お願いいたします。

〔注〕

長崎で行われた第二回原水爆禁止世界大会の開会総会で、長崎の被爆者を代表して訴えた渡辺千恵子の発言の一部。原爆青年乙女の会に所属し、原水禁運動に尽力した渡辺千恵子の最初の原爆被害を訴える公式な発言でもある。壇上に母に抱えられて立った渡辺の姿と言葉に、参加者は感銘を受け、長崎における原水禁運動は盛り上がりを見せていく。原水禁運動は、被爆者が自分自身の体験を徐々に外に向かって語り始めるきっかけの一つとなった。

(『長崎に生きる』渡辺千恵子、新日本出版、1973年所収)